

# 源氏物語「輝く日の宮」巻について

吉 岡 曠

本稿は、玉鬘系後記説の立場から、桐壺巻の次に想定されている欠巻の問題を検討するのが目的である。そこで順序として、始めに玉鬘系後記説及びその批判説についての私の考え方を簡単に述べておきたい。

武田宗俊氏は、「源氏物語の最初の形態再論」の冒頭で、後記説の論拠を十一ヶ条にわたって挙げ、その中(一)から(四)までが氏の「論拠の中心」であり、(五)以下は「傍証」であると云っておられる。その(一)から(四)までを要約すると、

一、紫上系は、それだけで独立した、統一のある物語の世界を形作っている。

二、玉鬘系は、それぞれ独立した幾つかの説話から成立しているように見えるが、その説話間に色々な意味での脈絡があり、一列の物語群として紫上系とは別な統一を保っている。

三、玉鬘系の事件や人物は、或程度紫上系のそれを前提としているが、紫上系は、事件、人物共に、少数の疑問の箇所を除いて、玉鬘系を全く前提としていない。特に、空蟬、夕顔、末摘花、玉鬘らの主要人物をふくめた十一

人が、紫上系に全く顔を出さない。

四、玉鬘系の巻々による紫上系の筋の不自然な中断とか、年月の逆行、重複、矛盾など、両系のつながり工合はおおむねぎこちない。

このほかに第八条に挙げられている、「文章、技巧、自然描写、性格描写、批評精神、人世観に於いて、紫上系の巻々のみに、又玉鬘系の巻々のみに共通の特色が見られ、後者の方が巧みであり、深さを増している。」という一項も、ここに付け加えておいてよいかもしれない。

右の諸点は、事柄の解釈や推測ではなく、単に事実を指摘しただけのことであって、これにより、第一部三十三帖として一篇の物語の体裁をなしているものから、一帖や二帖ではなく、約半数の十六帖を取り除いた残りの十七帖が、それによって筋の運びに、どのような細部についても殆ど何の影響も蒙らず、ほぼ完全に一篇の完成した物語の面目を保っているという驚くべき事実が認定されることになる。武田氏はこの異常な事実について、いわゆる玉鬘系の十六帖が、後記挿入された結果ではないかと推定された。そしてその推定の裏づけとして求められたのが、(五)以下の「傍証」と云われる部分である。この関係を図示すると次のようになる。

事実認定 ↓ その理由の推定 ↓ 傍証 ↓ 結論

私は後記説の構造を右のように理解しているのだが、従来の反論の多くは、この点についての認識に欠けるところがあるように思われ、そのため論の力点の置き方に大きなずれを生じさせているようである。右の構造からわかる通り、後記説の骨格は、紫上系と玉鬘系の関係が「松にからみついた藤」のようなものであるという事実認定と、それが後記挿入の結果ではないかという極めて自然な推定とにある。従って、後記説を有効に反ばくするためには、この事実認定をくつがえすか、或いはこの事実を説明する、後記説よりも更に妥当な解釈を見出すかのいずれかしかない筈

だが、従来の批判説の多くは、この最も肝要な点に正当な考慮を払わず、殆どその前を素通りして、「傍証」の部分に集中している観がある。又、後記説の全体観に欠けていることは、「傍証」の批判の仕方そのものにも影響して、必要以上に辛い、実情に合わない採点をする結果になっているようである。武田氏が傍証として挙げられた、呼称や年立上の矛盾、卷々の頭尾に見られる特徴などは、それだけを取り出して、直接、かつ個別的に結論に結びつけようとする限り、論拠として不十分であることを免れないが、右の後記説の「骨格」を前提にして、それを裏づける資料として見れば、それぞれ十分考慮に値する証跡であり、そのようなものとして後記説に取りあげられているのである。そしてこれらの傍証の一つ、二つ、或いは全部が仮に否定されたとしても、その前提は無傷のまま残るであろう。前提、即ち事実認定の正当さとその解釈の合理性が、傍証を生かしているのであって、その逆ではないからである。

ところで、紫上系と玉鬘系が水と油のように分離されるというこの事実認定について、先に傍点を附しておいた如く、或いは玉鬘系の記事を前提にしているのではないかと思われる、いくつかの疑点がある。筋の上で、葵巻に認められる二箇所、人物で、惟光、右近のぞう、六条御息所、朝顔の姫君にかかる若干の疑義だが、結局これだけが、後記説の成立に対して積極的な障害になり得る問題点であると云ってよい。

この中、筋の上の疑点については稿を改めて書くつもりだが、人物に関する疑問は、多かれ少なかれ、桐壺巻と若紫巻の間に想定される欠巻の問題と関連をもっており、特に朝顔の姫君のそれは、欠巻の存在が立証されない限り、おそらく納得のいく解決は難かしいであろう。以上大変大ざっぱであるが、玉鬘系後記説についての見解を述べ、本稿で「輝く日の宮」巻論を取りあげた所以を明らかにした。

## 二

前章に述べた諸根拠の上に立って、武田氏は、玉鬘系の十六帖が後記挿入された巻々であると結論されるのだが、この紫上系と玉鬘系の区別は、何らかの形で源氏物語関係の古記録の上に影を落していないであろうか。その意味で、古来並びの巻と呼ばれている巻々が存在し、その中第一部に關係のある十四帖が、玉鬘系の十六帖から帯木巻と玉鬘巻を除いた十四帖と全く一致していることは注目し得る。

源氏物語を、巻第一桐壺、第二帯木、空蟬は帯木のならば、夕顔二のならば、巻第三若紫という妙な数え方をする慣習は、この物語の最古の註釈書である、平安末期の世尊寺伊行「源氏釈」以来、「ならば」の意義については様々の異論がおこなわれながらも、近世まで殆どすべての註釈書が踏襲したところである。「ならば」の意義については、それらの諸註はいずれも、物語の内容に基づく分類であると解した点で、大同小異のだが、近年、成立論の立場からこの問題が見直されるに及んで、「ならば」は後記並置の意であるとされた。風巻景次郎氏の「源氏物語成立に関する試論」（国語国文、昭和二十六年五月）がそれであり、武田氏にも「並の巻について」という一文がある。玉鬘系後記説の論拠が、そのまま「ならばの巻後記並置説」の論拠に重なるわけなので、武田氏はこの論で別の面から並置説を説いておられるが、就中、古来の諸註が「ならば」の概念を物語内容の構造分析から生じたものと考えたために、その意義の解釈が多岐にわたり、次第に複雑化して、しまいには得体の知れないものと化し、江戸期に入って、「さして用なきこと」と無視されるに至った、定家以来のいわば「ならばの巻」誤解の歴史を述べた部分は、大変納得的な文章である。

ところで、当然「ならばの巻」に入るべき帯木巻と玉鬘巻が、何故本系の巻に数えられているのかという疑問に対

し、風巻、武田両氏とも、桐壺巻の次、乙女巻の次に、それぞれ欠巻を想定して説明されるわけだが、その手がかりになった唯一の資料が、次に掲げる定家の「源氏物語奥入」の記事である。

うつせみ二のならびとあれど、はゝ木々のつき也、ならびとは見えす、一説には、二かゝやく日の宮、このまきなし、ならびの一はゝ木々、うつせみはおくにこめたり、二ゆふかほ。(定家自筆本奥入)

或いは

うつせみ、二のならびとあれどはゝ木々のつきなり、ならびといふへくも見えず、一説には、巻第二かゝやく日の宮、このまきもとよりなし、ならびの一はゝ木々、うつせみはこのまきにこもる、二ゆふかほ。(大島本奥入)

武田氏は「並の巻について」で、定家が「うつせみ二のならびとあれどはゝ木々のつき也、ならびとは見えす」と云っている言葉に注目して、定家は、「ならび」について一つの概念を持っていたが、その概念では、既に存在する「ならび」の巻の全部を説明することが出来なかった、つまり定家の時代には既に「ならび」の意義が不明になっていたと云われる。そして空蟬巻が当てはまらないことよって、定家の「ならび」の概念は、後に「横のならび」と云われたものに相当するものであると云っておられる。いずれにしても定家は、「ならび」についての自説が空蟬巻に通用しない不審を解くものとして、「輝く日の宮」という巻が、桐壺巻の次にかつて存在したという「一説」を紹介しているわけである。

定家が「二のならびとあれど」と云っているのは、当時そのような数え方が一般になされていたわけで、先の源氏釈にも「二のならびうつせみ」とあって、「ならび」という言葉の出る最古の文献であるが、これは勿論源氏釈で始めて「ならび」という概念が発生したことを意味しない。「ならび」が本来後記並置の意味であるとすれば、これは単にそうした成立過程上の事実を事実として指摘した言葉に過ぎず、源氏物語が研究的な態度で受け入れられるよう

になった以後の概念と考える必要はないのである。藤田徳太郎氏が、並びの巻は作者自身の附したものであろうかと云っておられるそうだが、いずれにしても源氏物語の成立事情がよくわかっていた時期に発生し、使用されたものであろうと考えることが出来る。そして源氏が研究的な態度で読まれるようになり、注釈その他の文献がぼつぼつ現れ始めた鎌倉初期には、そして当時の最高の古典学者である定家には、「ならび」の意義は既に不明になっていた。これはこの物語の成立事情が、定家の時代には既に殆どわからなくなっていたということの意味している。

定家は第一次奥入（大島本）の訂正本である第二次奥入（定家自筆本）にもこの部分の註記は残しており、この「一説」に或程度の執着を持っていたことはうかがわれるのだが、右のような事情から単に一説として紹介する以外に仕方がなかったのである。「ならび」の意義が既に不明になっているような現状では、同じく成立過程上の問題である「輝く日の宮」巻の存否を決定する手がかりも、やはり全く失われていたのである。そして若しこのような欠巻が事実存在したとすれば、鎌倉初期は、それがおぼろげながら伝説のような形で伝わっていて、やがて全く埋没してしまふ、微妙な時期であったと考えることが出来、定家によって辛うじてこのような形で書きとめられたことは幸いであつたと云わなければならないのである。

## 三

「輝く日の宮」巻の問題に最初に触れたのは玉上琢弥氏「源語成立攷」（国語国文、昭和十五年）だが、戦後、池田亀鑑、風巻景次郎、武田宗俊氏等によって様々な角度から論じられた。定家は「並びの巻」に対する自説の合理化という目的でこの問題を取り上げ、それはそのまま「並置説」の合理化として風巻氏らによって受けつがれたわけだが、近年定家の註記が注目されたのはむしろ別の動機に基いており、これらの欠巻を認めることで、帯木巻と玉鬘巻が

「並びの巻」の数に入っていないことが合理的に説明出来るということは、「輝く日の宮」巻存在説の傍証の一つと解した方がむしろ適當である。

右の各氏が欠巻の存在を主張されるのはそれぞれ目的というべきものが異っているのだが、その発想はおおむね軌を一にしていて、源氏の元服後数年の記事が現在の源氏物語では空白になって居り、その間に源氏と藤壺の恋の進展、六条御息所や朝顔の姫君、五節らとの恋のいきさつがある筈なのに具体的な記述が欠けているという事情に基いている。「輝く日の宮」巻を想定することによってこれらの不自然さは解消するのである。

これに対して当然反論があったわけだが、長谷川和子氏著「源氏物語の研究」所収の論文が発表の時期も最も新しく、これまでに提出された反対説の中で代表的なものと思ふことが出来るので、以下直接には長谷川説を手がかりにしながら叙述を進めていきたい。

「輝く日の宮」巻存在説にとって第一の障害は、文献上の資料としてそのことにわずかに触れているのが、奥入の記事しかないことである。これに就いて長谷川氏は次のように云われる。

「輝く日の宮」に関する文献は、先に挙げた源氏物語奥入の註記のみであるし、「輝く日の宮」の巻以外に桐壺と帚木の間挟まる、今は伝わらない何らかの巻があったという外的徴証はない。特に、現存しない巻々の名や人物さえも記している源氏物語古系図、「桜人、狹蓆、巢守」などの名を挙げている白造紙なども「輝く日の宮」には触れていない事実も軽視出来ない。(同氏著六四頁)

これは一応もつともな指摘なのだが、しかし先に述べたように、「ならび」が本来後記並置の意味であるとすれば、源氏物語の文献らしい文献が現れ始めた平安末期、鎌倉初期には、そのもつとも古い時期に属する源氏釈や奥入の著者達が「ならび」の意義を誤解する程度に、既にこの物語の成立事情が不明になっていたわけであり、「輝く日の宮」

が式部自身によって書かれ、式部自身によってか、或いは誰が他の人物によるとしても、物語成立後間もなく削除された巻、つまり当初の成立事情に関係のある巻だとすれば、この巻の存在が「ならび」の意義と共に当時既にほぼ完全に消滅しかかっていたことも充分首肯出来ることであって、源氏釈や奥入以後の文献、つまり今日残っている源氏物語関係の全文献に、「輝く日の宮」或いはそれに相当する欠巻の存在が記録されていないことは、当然の、致し方ない事情だと云わなければならないのである。

そして桜人、狹蓆、巢守などのやはり現存しない巻名をあげている源氏物語古系図や白造紙などに、「輝く日の宮」の名があげられていないことは、「輝く日の宮」はこれらの、大部分後人の偽作と推定される巻々とは、成立事情や出所を異にしたものだと考えることが出来て、これはむしろ「輝く日の宮」巻存在説にとって有利な条件であると云えないことはない。（古系図その他の出典にかかる巢守その他の現存しない巻々に就いては、松尾聰博士の「源氏物語入門」の中の「今の源氏物語は原作のままではない」という説に就いて」、長谷川氏の著書の第四章「匂、紅梅、竹河三巻の問題」に詳しい。）

次に「輝く日の宮」という名称が、源氏物語の巻名の中で異例であることが問題になる。長谷川氏は、「命名には一貫したそれとない統一があつて、異質の名称が一つだけ混つていた可能性は少い」と云われるのだが、「輝く日の宮」がそのまま異質の名称として一つだけ混つていたと考えなければならぬわけのものでは必ずしもないであろう。源氏物語の巻名が、いつ頃、誰の手によってつけられたかということが明らかにならないとはつきりしたことは云えないが、この巻が削除された時或いは消滅した時に、既に巻名がついていたとすれば、定家の時代までに内容・巻名共に滅び、まだ巻名がついていなかったとすれば、そのまま内容だけが滅びて、「輝く日の宮」の事件が主題になっていた巻」という程の意味で「輝く日の宮」と呼び馴らされて伝わってきたと考えることは先に述べたような事情か



らも充分考え得ることである。そしてこの場合も、巢守、桜人などのようにもつもらしい名称が与えられていないことは、古系図などに名の出ないことと共に、かつて実際にそのような巻が存在していたとして、その滅び方の完全であることを物語っていて、それは消滅の時期が非常に古いこと、更に消滅の仕方が偶然によるものではなく意識的な廃巻であることを思わせるものであり、武田氏らが、玉鬘系の挿入の際に作者自身によって意識的に削除されたものであろうと推定される事情と合致することになるのである。

右のような次第で、桐壺巻の次の欠巻は奥入の註記にわずかに影をとどめたが、武田氏の云われる乙女巻の次の欠巻「X」は文献上には影も形も現われない。しかしこれも「輝く日の宮」巻と全く同じ次第で巻名内容共に滅び、定家によって「一説には云々」と註記される幸運にも恵まれなくて、わずかに玉鬘巻が本系に数えられている点に痕跡を残した巻であると考えれば、その存在をあかしする外的条件は「輝く日の宮」巻と殆ど変らないと云えるであろう。いずれにしても源氏物語の文献が平安末期以降に限られている現状では、文献上の証跡が乏しい、或いは皆無であることによって、これらの欠巻の問題性を否定することは正しくないのである。この問題に関しては現存の文献は全く無力と云うよりも無関係であると云うことが出来る。そして奥入の註記は、それがもっとも古い文献の一つであること、定家という当時最高の古典学者の手になったものであることによって、本文の検討の結果欠巻の存在を想定するのが至当だということになれば、その或程度の裏づけ位には充分なり得る資料である。

なお長谷川氏が「『輝く日の宮』の巻を想定するのは、並びの概念が発生して後の要請と考えてよかろう」（同氏著六六頁）とやや唐突に云っておられるのはうなずき難い。定家が、「うつせみ二のならば」と云われていることに不審を抱いてこの「一説」を引用していることは事実だが、「巻第二輝く日の宮、（このまきもとよりなし）、ならひのいは木々、二ゆふかほ」というこの一説自体が「或は源氏物語享受者の、並びの巻に対する自説を合理化せんとした

試みであつて、実際には原作と関わりがなかつたものであつた可能性もあると思われる」というのは、かなり飛躍のある解釈である。この「一説」をどの程度に信用してよいかは、奥入の註記に關してのみ云えば、定家が二次本にもこの部分を残しているということ以外に全く手がかりはないが、単に並びの巻に對する自説を合理化するために、原作と無關係な架空の巻を勝手に作り出すという、乱暴でしかも手のこんだ操作は常識では一寸考え難い。もつとも今日「輝く日の宮」の存在が要請されているのと同じ規模の發想に基いてのことと考えれば話は別だが、平安時代にそのような研究態度が存したと考へるのはやはり無理な想像であらう。「ならび」の概念自体、それが後記並置の意であるとすれば、決して複雑な概念でないことは先に述べた通りで、この「一説」は、全くの「作り話」でない限り、やはり何らかの事實をそのままに伝えたものと考えたい。そして、この「一説」の伝える事實が實際の成立事情に合致しているかどうかを決定するのは、現行の物語に存在する筋の上の飛躍や省略が、欠巻の存在を想定させるに足るものかどうかの判定以外にはないのである。次にその検討に移ることにするが、この場合後記説の立場からは、当然帚木以下の三帖の叙述は除外することになるが、ここでは現在の巻序のままに書かれたものと仮定して検討していきたい。

## 四

はじめに藤壺に就いて。我々は桐壺巻で、源氏が亡くなつた母に生写しといわれる藤壺の女御に幼いあこがれを抱いて、それが眷のおわりにはどうやら恋心にまで成長したらしいことを知らされる。

ただ、藤壺の御有様を、たぐひなしと思ひ聞えて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似るものなくもおはしけるかな、……をさなき程の御ひとへ心にかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。(吉沢義則博士「対校源氏物語新釈」、以下

本文の引用は同書による。

そしてこの二人は世人から「光君」「輝く日の宮」と並称されていて、我々はこの物語を先ず、光源氏の藤壺に対する恋の物語として読み始めるわけだが、当時と現代の倫理意識の差も手伝って、桐壺巻では未だ父皇の后との密通が成立するであろうとまでは予感しないし、予感させるだけの材料もない。むしろ藤壺に対する思慕は、葵上に対するあきたらなさと共に、次巻以後に展開するであろう、源氏の恋の遍歴の動因としての役割を荷っているように見える、巻末の、

かゝる所（二条院）に、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、歎かしうおぼしわたる。

という一節も、そのような方向に筋の發展することを約束している。そして帯木以下の三帖では、藤壺関係の記事は次の三箇所のみである。

君は人一人の御有様を心のうちに思ひつゞけ給ふ。これは、足らず又さしすぎたる事なく物し給ひけるかなと、  
ありがたきにも、いとど胸ふたがる。（帯木巻）

さるべき隅にはよくこそ隠れありき給ふなれなどいふにも、おぼすことのみ心にかかり給へれば、まづ胸つおれて、かやうのついでにも、人のいひ漏らさむを聞きつけたらむ時、など覚え給ふ。（帯木巻）

秋にもなりぬ。人やりならず心づくしにおもほし乱る事どもありて、大殿には絶間おきつゝ、恨めしくのみ思ひ聞え給へり。（夕顔）

仮にこれらの記事から何か特別の意味を読みとるとすれば、源氏の心底には藤壺に対する遂げられない恋の思いがわだかまっついていて、それが源氏の、大げさに云えば恋の放浪の下地になっているという風に考えることになる。しかしこれらの記事はこうして取出してみるとそれなりに目をひくが、実際は玉鬘系の話や紫上系の物語に結びつける

だけのもので、いずれも概念的な、その場限りの叙述に過ぎず、藤壺に関しては、と云うよりも桐壺巻に始まる物語は、この三帖で中断しているというのが読者の実際に受けとる印象である。この中で「かやうのついでにも人のいひ漏らさむを聞きつけたらむ時云々」は、後に思い合わせれば、この時既に密通が成立していたことを物語っているが、我々は無論そのようなことは毛頭思ひ及ばず、藤壺と源氏の間柄は、桐壺巻のおわり頃の状態がそのまま続いていると考えているほかはない。要するにこの三帖の藤壺に関する叙述は、桐壺巻で我々が読みとっていた事実以上には一歩も出ていないのである。そして次の若紫巻では早くも紫上が登場する。

つらつきいとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶり、いわけなくかいやりたる額つきかんざし、いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは限りなく心を尽し聞ゆる人に、いとよう似奉れるがまもらるゝなりけり、と思ふにも、涙ぞおつる。

我々は桐壺巻以来藤壺という女性に、源氏にとつての一種の観念の恋人というイメージを押しつけがちなのであるが、ここで、藤壺に対する源氏の思慕は、紫上の登場を準備するための単なる伏線の如きものであったと、たとえ一時にもせよ、かなりはつきりと誤解することになる。そしてこの誤解はこのような若紫の登場の仕方に、必要以上に型通りの観念臭を帯びさせる原因になっている。云いかえれば、ここで源氏が、顔を「赤くすりなして」立った十ばかりの童女に、一目で強い執着を覚える心の動きは、これまでの藤壺関係の記事の概念的な説明だけでは、抽象的にしか理解出来ない。というよりもむしろ先行する藤壺関係の記事によって一そう抽象的な、型通りのものに受けとられる。そしてこの時の藤壺と源氏の実際の関係は、もっと先の方で、

宮もあさましかりしをおぼしいづるだに世と共の御思ひなるを、さてだに止みなむと深うおぼしたるに云、と唐突に知らされるのである。

読者はここで当然一種のとまどいを覚えるのだが、これはこの部分に該当する記事がこれまでの叙述に欠けていることに對する不審だけではなく、それが欠けているために、紫上の登場を契機にして、我々は源氏と藤壺、源氏と紫上、藤壺と紫上という三者のそれぞれの關係に就いて、多少ずつ誤った觀念をつくりあげていて、それをここで無意識にもせよ訂正することを余儀なくされるという事情に基いているのである。特に現代の読者に就いて云えば、藤壺と源氏の最初の逢瀬の具体的な描写が欠けていることは、紫上が登場する場面の受けとり方に影響するだけではなく、藤壺はこの物語に於いて、「理想の女性」という觀念として源氏を動かしているという錯覚をその後も持続させて、藤壺をダンテに於けるベアトリーチエの如き「永遠の女性」に仕立て上げる素地をなしているように思われる。そしてこれはこの物語に對する様々な近代的な誤解の典型と云つてよいものである。

いずれにしてもこの物語の最初の、そしてもっとも重要な主題のクライマックスは、我々が何にも知らないうちに終つてしまつてゐるわけだが、この不可解な現象は、作者が藤壺に關してはつとめて臆化して、暗示的に描こうとしているということの説明がつくであろうか。藤壺との密通場面が徹底して避けられているのならばこのような考え方も或程度うなずけるのだが、事實は右の「宮もあさましかりしを云、」に續いて、三条の宮に里帰りした藤壺に女房の手引で逢う記述があり、賢木巻にも同様な場面があつて、賢木巻の場合はこの物語中でも特に具体的な、ヴィヴィッドな描写がなされているのである。第二、第三の機会に筆を費して、最初の場面だけは殊更に省略するという何か特別な事情があつたのであろうか。私は藤壺に關してはつとめてリアルな描写が避けられているという認識自体にも或種の現代的な思い過しがふくまれているように思われるのだが、例えば若紫巻の場面は次のように描かれている。

いかがたばかりけむ、いとわりなくて見奉るほどさへ、現とは思へぬぞわびしきや。宮も浅ましかりしを思し出づるだに、世と共の御物思ひなるを、然てだにやみなむと深う思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なる

ものから、懐しうらうたげに、さりとて打解けず、心深う恥かしげなる御もてなしなどの、猶人に似させ給はぬを、などか斜なることだに打交り給はざりけむと、つらうさへぞ思さる。何事をかは聞えつくし給はむ。くらぶの山にやどりも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなか／＼なり。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな  
とむせかへらせ給ふさまも、流石にいみじければ、

世がたりに人やつたへむたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても

おもほし乱れたる様も、いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などはかき集め持て来たる。

山本健吉氏はこの部分を「伊勢物語の斎宮との逢う瀬に似て、神韻縹渺とした書きさまであり云々」と云っておられるが、確かに父帝の妃である藤壺との逢瀬に、作者の筆が幾分思わせぶりになる傾向はあるようである。しかしこれは作者の倫理的な心づかいと云うよりはむしろ、そのような立場の恋を描くための一種の技巧、芸術的な心づかいであつて、作者は最後に、「命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集め持て来たる」と書きそえることも決して忘れてはいないのである。賢木巻の場面もついでに引用すると、

やおら、御帳の中にかゝづらひ入りて、御衣の襟を引き鳴らし給ふ気はひしるく、さと匂ひたるに、あさましう、むくつけう思されて、やがてひれ伏し給へり。見だに向き給へかすと、心疚しう辛くて引寄せ給へるに、御衣を滑し置きて、いざり退き給ふに、心にもあらず、御髪を取添へられたりければ、いと心憂く、宿世の程思し知られて、いみじと思したり、男も許多世を持って鎮め給ふ御心皆乱れて、現し様にもあらず云々

両者の切迫した身心の動きが簡潔な筆致で鮮やかに描き出されているが、例えば紫上との新枕を「男君はとくおき給ひて、女君は更におき給はぬあしたあり。」と一言で片づけているこの物語に於いて、これはむしろ異例と云って

よい程リアルな描写である。藤壺との恋が殊更におぼめかされているというのは、その恋の最初の場面が不自然に省略されていることに、そのような印象の大部分を負っていると考えた方がむしろ実情ではないかと思う。源氏の初恋であり、或る意味で終生の恋の対象である藤壺との最初の逢瀬と、そこに至るまでの経過にはやはり一巻が費されてゐて然るべきだと考えてよからう。

六条御息所に就いては、夕顔巻の冒頭に、「六条わたりの御忍びありきの頃云々」とあるのがこの物語に於ける初出である。そして以下、

御志のところには、木立、前栽など、なべての所に似ず、いとどのどかに心にくく住みなし給へり。うちとけぬ御有様などの、気色ことなるに、ありつる垣根おもほしいでらるべくもあらずかし。

六条わたりにもとけがたかりし御気色を、おもむけ聞え給ひてのち、引きかへしなめならむはいとほしがし。されどよそなりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも、いかなる事にかと見えたり。女はいと物をあまりなるまで思ししめたる御心さまにて、齡の程も似げなく、人の漏り聞かむに、いとど斯くつらき御夜がれの寝覚寤覚おぼししをるる事、いとさまさまなり。

又、

六条わたりにも、いかに思ひ乱れ給ふらむ、恨みられむも苦しうことわりなりと、いとほしきすぢはまづ思ひ聞え給ふ。何心もなきさしむかひを、あはれとおぼすまゝに、あまり心深く、見る人も苦しき御有様をすこし取り捨てばやと思ひくらべられ給ひける

と、この巻ではとどころに御息所に触れた叙述がある。

これらの叙述は御息所を読者にとって既知の人物として描いており、その素姓や御息所という名前すら数巻後の葵

巻で始めて明らかになるわけで、初登場の人物の紹介の仕方としては極めて異例だが、長谷川氏は、これらの数節は「相当意識的に御息所の本質を繰り返し強調したものであり、源氏物語の全巻を通読して得られる六条御息所の性格や環境に就いての知識は、殆どこれらの記述で尽されていて、若し現存しない先行の巻があつて、そこに御息所の素姓や性格が一応描かれていたら、これ程説明的な感じのするくり返しを、作者はおそらくしなかつたであろうと云つておられる。（七二頁）しかし作者はこの巻で、御息所という女性の性質を、「相当意識的に」くり返して強調する必要を持っていなかつたであろうか。後の夕顔怪死の場面に物怪が出現することと思ひ合わせれば、御息所のかた苦ししい性質や、そのため源氏の足が遠のいて一方、「女はいと物をあまりなるまで思ししめたる御心さま」で、「斯くつらき御夜がれの寢覚寢覚おぼししをるる事、さまざまなり」という事情を適当に点出しておいた理由は、物怪事件の伏線として容易に理解されるのである。しかも御息所についてのこの巻だけの叙述では、伏線としてすら叙述不十分で、物怪の主体を六条御息所であると読者にはつきり納得させるまでに至っていないことは、現にこの物怪の正体について様々な異論がおこなわれていることからもうかがえる筈である。これらの記述については、作者が葵巻の事件を前提として書き、当初の読者もそれを前提として受けとっていたと考えるのがもっとも妥当である。

なおこの時の物怪が六条御息所の生霊であるということを作者は明記していないが、源氏が、「何心もなきさしむかひを、あはれとおぼすまゝに、あまり心深く、見る人も苦しき御有様をすこし取り捨てばや」と、夕顔の人柄と比較しながら御息所を心ひそかに非難した文章にすぐ続いて、

宵過ぐるほどに、すこし寝入り給へるに、御枕上に、いとをかしげなる女居て、「おのがいとめでたしと見奉るをば、尋ねもおもほさで、かくことなる事なき人をゐておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起さむとすと見給ふ。



と物怪が出現していることから考えて、作者がこの物怪の主を御息所であると暗示しようとしていることは明らかであろう。(若菜巻で、やはり御息所の死霊が現れる際に、源氏が紫上に向つてあからさまに御息所を批判したためであると理由づけられていることも、この場合の参考になる。)

右のような次第でこの巻の御息所に関する叙述は、夕顔怪死の伏線としての意図から要所要所に配置されたものと考えられるが、長谷川氏が指摘されるように、これらの叙述は「輝く日の宮」巻に描かれていたであろう事柄と或程度重なりそうであつて、若し現行の巻序に従つて、夕顔巻が「輝く日の宮」巻のすぐ後に書かれたならば、或いはこれ程「説明的な感じのする叙述」は避けられていたかもしれない。しかしだからといって、それだけの理由で夕顔巻の記事を御息所の初出の記事として読まなければならぬ不自然さを無視するわけにもいかず、これらの矛盾は、夕顔巻が紫上系の執筆後時をへだてて書かれた、短篇小説的な構成を持つ巻であると考えることによつて、はじめて合理的に解決されるのではなからうか。後記説の立場から夕顔巻の記事をすべて除外すると、六条御息所については、葵巻の、

まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊の姫宮云々

が初出の記事になり、「まことや、かの」という明らかに先行の記述を受けるべき言葉が全く宙に浮くことになる。

なお賢木巻には、

御息所、御輿に乗り給へるにつけても、父大臣の、かぎりなき筋にとおぼし心ざして、いつき奉り給ひし有様変りて、末の世に内を見給ふにも、物のみつきせずあはれにおぼさる。十六にて故宮に参り給ひて、二十にておくれ奉り給ふ。三十にてぞ今日また九重を見給ひける。

というかなり具体的な経歴の紹介があるが、長谷川氏はこの一節に見られる年紀上のミス(この時から十年前に前坊

が存命だったとすると、桐壺巻の源氏元服の頃に当るその時期には、既に朱雀帝が春宮の位についていて、幾年かの間春宮が二人あつたことになる。に注目して、若し「輝く日の宮」という巻が存在して、そこに御息所の春宮への入内などの具体的な叙述があつたとすれば、犯す筈のないミスであると云われる。（七三頁）しかし「輝く日の宮」巻で御息所がどのような紹介の仕方をされたかは知る由もないが、長谷川氏が云われるように「六条御息所の春宮への入内、姫宮誕生、春宮との死別」などまで具体的に書かれていなければならぬと考える必要は全くなく、仮に右の年紀で計算しても、輝く日の宮巻で源氏が通い始めた頃は、前坊の死から何年かが経っていた筈であるから、六条御息所は単に姫宮の一人ある前坊の未亡人としてこの物語に登場したのであるかと考へるのが自然な推定である。「十六にて故宮に参り給ひて云々」という経歴の説明が賢木巻にあること自体、輝く日の宮巻ではそのような記事が全く省かれていたであろうことを物語っている。従つてここに見られる年紀上のミスも、この経歴を追加する際に生じた、単なる不注意として容易に見逃すことが出来るであろう。

次に朝顔の姫君、筑紫の五節に就いても、その初出の記事はそれぞれ、

式部卿の宮の姫君に、朝顔奉り給ひし歌などをすこしほほゆがめて語るも聞ゆ。（帚木巻。紫上系での初出は葵巻の、かかることを聞き給ふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深うおぼせば云々）

かやうのきはに筑紫の五節こそらうたげなりしはやとまづおぼし出づ。（花散里巻）

であつて、いずれも源氏との最初の交渉の様相が省かれて、唐突としか云い様のない登場の仕方をしている。

長谷川氏はその論のところどころで、「作者は初登場の人物などにも、恰も読者の既知のものである如き云い方をして、巧みに説明する場合があるから云々」とか、「その記述が実際にはなかつたもので、しかもそれを読者に対しては、はっきり記述した事のように語りかける作者の例の手法云々」という風に云つて、それを一つの論拠にしてお

られるが、しかし私の見たところでは、女房とか従者などほんの端役の人物の場合を除いて、長谷川氏の云われるような事実や「手法」は、ここで問題になった藤壺以下の四人の場合に限られているようである。そしてその四人が登場する時期（或いは事件の省略されている時期）が、桐壺巻と帚木巻（或いは桐壺巻と若紫巻）の間、即ち「輝く日の宮」巻にふくまれるべき期間に集中していると推定されることは、極めて注目すべき現象である。個々の場合に限って云えば、それぞれ何らかの偶然的事情や、作者の手法というようなことも考えられないわけではないが、特別の理由もなく不当に省略されている事件が、すべて物語中の一定の期間に集中して起っているという事実は、決して偶然とは考えられない。しかも桐壺巻と帚木巻或いは若紫巻の間には四年乃至六年という、第一部では異例の年紀上の空白があるのである。

以上のような次第で、私は、この空白の期間には元一卷が存在した筈であるという武田氏らの説に賛成である。そしてこの現存しない巻は、輝く日の宮との事件を中心にしながら、六条御息所や朝顔の姫官や五節の舞姫とのいきさつをからませて（それぞれ趣きは違うがいずれも青年期の恋の相手としてふさわしい女性達である）、光源氏の多感で、やや軽率な、要するにいかにも青春らしい青春を描いた面白い巻であつたろうと想像している。帚木以下の三帖を挿入する際に、あまりにも同種の事件が重複することを慮って削除したものであろうが、それとこれとは外観は似ていても物語としての本質は全く異っていた筈であり、現在の源氏物語では、光源氏の恋愛には何かみずみずしいものが欠けているという感みなしとしないのだが、その意味でおそらく伊勢物語の初冠の段や二条后関係の段に似た情感をたたえていたであろうこの巻がなくなっていることを惜しまざるを得ない。

以上で「輝く日の宮」巻についての検討を終るが、この欠巻を想定することで、桐壺巻が、帚木巻とも若紫巻ともスムーズにつながらないことから、やはり後記されたものではないかと云われていた疑問も氷解するし、第一章で述

べた朝顔の姫宮についての疑問も、帚木巻の「式部卿の宮の姫君に朝顔奉り給ひし歌を云々」の記事の前に、「輝く日の宮」巻でその事実が描かれていて、葵巻の記事はそれを受けたものであると考えることによって解明される。

なお惟光についても、夕顔巻に、「大貳の乳母いたくわづらひて尼になりける、とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。御車入るべき門はさしたりければ、人して惟光召させて、待たせ給うける程云々」とあるのが初出だが、やはり惟光は既知の人物として取り扱われている。この場合は岩波文庫本にして約一頁後に、「惟光が兄の阿闍梨、婿の参河守、女など渡り集ひたる程にて云々」とあって、乳母の子であることは自然に明らかになるが、「輝く日の宮」巻が存在したとすれば、やはりそこに初出の記事があったと見るべきである。この巻で惟光が源氏の忍び歩きのお伴をして、夕顔巻以下に劣らず活躍したであろうことは容易に想像することが出来る。由来若い貴公子の恋煩いに、目端の利いた或いはとぼけた「忠僕」が、お先棒をかついだり、取持役を演じたりして影の形にそうようにつき従うことは、東西の文学の常例である。

## 五

乙女巻の次の欠巻「X」に就いても簡単に触れておくことにする。結論を先に云えば、私はこの巻もやはりかつて、実際に存在したと考えたい。文献上の記録が皆無であることは、実質的には輝く日の宮巻も殆ど同じ条件であることは前に云ったが、後記説の立場から玉鬘巻以下の十帖を取除くと、乙女巻と梅枝巻の間に四年の空白が生じること、この両巻の内容のつながり工合にもやはり多少の隙間が認められることなどの理由による。この隙間は「輝く日の宮」巻程顕著ではないが、一方はこれから物語が発展しようとする発端に近い巻であり、他方は結末に近く物語を整理する段階の巻であるためと考えることが出来ようと思う。巻の内容に発展性がないから、欠巻になっても後に影響

することが少ないのである。例えば現在の梅枝巻が欠巻になっていたとして、我々はその脱落到気付くであろうか。それにしても、例えば初音巻や胡蝶巻に描かれているような六条院栄華の有様が、紫上系の物語でもう少し描写されてよい筈であり、大ざっぱに云うと、玉鬘巻以下の十帖から玉鬘君に関する話を抜き取った残りを一まとめにしたような内容の巻が、乙女巻と梅枝巻の間に想定されるのである。

なお玉鬘巻が本系の巻に数えられていることが、「輝く日の宮」巻にくらべて存在したことの徴候に乏しいこの巻の場合、特に大きな意味を持つてくることは云うまでもない。そして「輝く日の宮」巻の存在が認められることが、或程度乙女巻の次の欠巻の存在証明になると考えても、必ずしも機械的な類推とは云い切れないであろう。

## 六

武田氏は「輝く日の宮」巻に就いての論の中で、常木以下三帖の藤壺や六条御息所に関する記事が先行の物語を前提としていることから、作者がこれらの巻を書く時「輝く日の宮」巻を廢巻にする意図はなく、それと並置の心組みで書かれたものであらうと云っておられる。これはおそらく氏の云われる通りなのだが、それでは乙女巻の次の欠巻「X」の場合はどうであらうか。この巻の主題は、先に述べたように六条院の生活絵巻が描かれていたであらうとしか考えようがないのだが、初音、胡蝶の両巻などはそのような「X」を前提にしたとするとあまりにも叙述が重複し過ぎるようである。つまり「X」巻の場合は、玉鬘巻以下の十帖が、欠巻の主題を前提にしているのではなく、中に取込んでいるといふ感じが濃厚である。この十帖が比較的自然に乙女巻と梅枝巻の間に収って、四年間の空白を埋め、重複も間隙も感じさせないのはおそらくこのためだが、とすると玉鬘以下の巻を書く際には、作者はあらかじめ「X」巻を廢巻にすることを決定していたということになる。そしてこれは玉鬘巻以下の十帖は執筆当初から現在のような

形で紫上系の中に組込まれることが予想されていたということを意味している。

ところで帯木巻以下の三帖が「輝く日の宮」巻と並置の意図で書かれたということは、この場合何を意味するだろうか。「輝く日の宮」巻と若紫巻の間に置かれることを意味するだろうか。若しそのように想定すると、長谷川氏が云われるように、夕顔巻のややくり返し之感の濃い御息所の記事が或程度問題になるであろう。それからこの巻で御息所の生霊が現れるのも、葵巻の物怪事件を前提にしないとやや説明不足の感を免れず、物怪の主体が何であるかはつきりしないということも先に述べた通りである。私は帯木巻以下の三帖が並置の意図で書かれたということは、「輝く日の宮」巻の次に置かれることではなく、それと文字通り並置されること、つまりこれらの巻の執筆当初、作者は紫上系の中に組みこむことを全く予定していなかったということの意味するのではないかと思う。

このような推定を裏づけるものとして、およそ次のような諸点を挙げる事が出来る。

光源氏、名のみことごとしう、いひ消たれ給ふとが多なるに、いとど斯かるすぎごとどもを末の世にも聞き伝へて、かろびたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ、語り伝へけむ人の物いひさがなさよ……  
帯木巻の冒頭だが、この物語中途の一卷にしてはやや物々しい書出しは、

かやうのくだくだしき事は、あながちに隠ろへ忍び給ひしもいとほしくて、皆漏らしとどめたるを云々

という夕顔巻の結末の文章と対応して、一篇の独立した物語の体裁を形造っている。そしてこのような形式に対応してその内容も、この三帖を一まとめにして独立した物語として読んだ方がふさわしいようなものである。右の冒頭・結末の文章でわかる通り、形の上では光源氏のエピソード集だが、光源氏は紫上系に於けると同じような意味で主人公であるのではなく、この三帖では主役は空蟬と夕顔という二人の女性であって、光源氏はこの二人を登場させるための狂言廻しのような役割をつとめているに過ぎない。そしてこの二人は作者が任意に選んだ性格ではなく、源氏

を拒み通した空蟬と、源氏に抱かれながら露のように消えた夕顔とは、女というもの、或いはこの時代に於ける女の生き方の二つの典型なのである。或いは女の愛の二様の現れ方である。この対照的な二つの女性像を描いたことで、この三帖を構想した作者の意図は完全に果されていると云ってよい。もっともそのような意味では玉鬘系の他のグループも、光源氏を狂言廻しとして利用しながら、末摘花物語、玉鬘物語として発想された、それぞれ個々のテーマを持った、本質的には独立した物語であることに変わりはないのである。だからこの場合は帯木以下の三帖が前述の如く形式的にも前後の巻々との孤立性が強いという点に特に注目して頂きたい。

次に叙述の細部に就いても、帯木巻以下の三帖は、紫上系の物語を前提にしていると云っても、「輝く日の宮」巻に就いて述べた時に実例をあげたように、藤壺と朝顔の姫宮に触れたわずかな記事と、物怪事件の伏線として利用した六条御息所に関する記事だけであって、実質的には筋の上でも紫上系からほぼ完全に独立していると云うことが出来る。このことはこの三帖の物語上の時期が、「まだ中将などにも少し給ひし時は云々」、「六条わたりの御忍びありきの頃云々」と極めて大づかみに紫上系と結びつけられているだけであることからもうかがえるのである。それからこの三帖と次の末摘花巻では源氏の呼称がすべて「君」で統一されていることも或程度注目に値する。

右のような次第で、私は帯木巻以下三帖の執筆当時、作者は紫上系の中に組みこむ意図は持っていなかったと考えたいのだが、それでは玉鬘系を現在のような形で本系の中に挿入する意図はいつ頃から生じたのであろうか。

蓬生、関屋の両巻がテーマの孤立性が稀薄で、むしろ孤立的に書かれた空蟬、夕顔、末摘花の各物語を紫上系の物語の中に溶けこませることを主要な目的にしたらしいことは、両巻の内容から容易に考えられることだが、とすれば問題は末摘花巻である。この巻は内容から云えば、帯木以下三帖のグループと同様に一篇の短篇小説として、まとまりのよい、孤立性の強い巻である。しかし、

わらはやみに煩ひ給ひ、人知れぬ物思ひのまぎれも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。

朱雀院の行幸、今日なむ樂人舞人定めらるべき由承りしを云々

など、帯木巻以下の三帖に比較すると、かなり細かく具体的に紫上系の筋を受けていて、最後に若紫と源氏のたわぶる様を点出していることなどは、帯木巻その他に比較すれば挿入の意図はより明瞭だと云わなければならぬ。

いずれにしても蓬生巻以後は、現在のような形で紫上系の中に挿入する意図が明らかはじめ存したことがはっきりうかがえるが、末摘花巻以前は不明であり、帯木・空蟬・夕顔の三帖は最初光源氏の物語の拾遺という形で、紫上系と並置される心組みであつたろうと推定した方がむしろ妥当のようである。そして玉鬘系の十六帖の中、最初の四帖では周囲の巻々とのつながり具合の不自然さが目立ち、蓬生巻以下が比較的自然に紫上系の中に溶けこんでいるという相違も、挿入の意図の有無という執筆事情の相違によるものと考えることが出来るのである。